

シンポジウム開催趣旨

植 崎 彰 一

本日は、遠くから、はるばるお越しいただきましてありがとうございます。今回のシンポジウムの企画に参画致しました1人として、このシンポジウムの課題について、若干、前置きを述べさせていただきます。

ご存知のように、猿投窯につきましては、今や、日本の最も古い高火度焼成の施釉陶器の産地として、全国に知られるに至っているわけですが、その実態と申しますか、あるいは全貌といったものは、この地域に住んでおり、実際の発掘や調査にかかわっている人達だけにしか、なかなかつかみきれないという問題があります。猿投窯は、昭和30年のはじめ、本多静雄氏に呼び出され、同氏および三上先生と一緒に歩いたのが最初です。それから昭和31年から昭和37年まで7年間、国庫補助を得て、県の古窯調査事業ということで発掘調査をし、一部、瀬戸、常滑を加えて、当時52基の窯跡を発掘したわけです。それからしばらく、発掘は、予算その他いろいろな経済事情もあってストップしておりました。その間、整理の方も遅々として進まず、発掘の概要を報告してきたにとどまるわけです。これまで、いくつかの書物に、猿投窯に関しての概況は報告してまいりましたが、詳しい全体の報告は、まだ完成致しておりません。その点で、発掘した者としては、学問のためにも、あるいは学会に対しても、詳しい報告書を出さなければならないと考えております。

今回のシンポジウムを『平安時代の土器・陶器』というテーマで開くことになりましたのは、この陶磁資料館が、研究機関として何をなすべきか、と考えた場合に、やはり、当館の建設の原点になりました、猿投窯を中心とした、平安時代の全国のやきものについてシンポジウムを開くことが最初になすべき仕事であると私ども関係者はひそかに考えてきたからであります。本館開館第2年度に際して、まず取りあげましたのが、この2階で特別陳列している「猿投窯展」です。これは、当館の学芸員諸氏が、集め得る限りの、全国の窯跡あるいは出土地から出たものを集めてまいりましたもので、とにかく、猿投窯の全貌をみなさんに見ていただくという展覧会を企画したわけです。と申しますのは、皆さん方も、すでに今回のシンポジウムで予期されていることと思いますが、年代の問題ですとか、やきものの範疇の問題とか、いろいろな問題があります。そうした問題が、猿投窯を媒介にしまして、この十数年来、日本全国の奈良・平安時代のやきものを研究しておられる皆さん方の手で、さまざまな形で報告あるいは研究されて、いろいろな説が出されています。しかし—私ども当事者として、本報告を出さないでいてこういうことを申し上げるのは僭越ですが—まだ充分実体をごらんにならなくて猿投窯を論じておられる論文も若干見受けるといようなことがございます。もちろん一方では、名古屋大学に來られまして、正しく破片を検討し、その上でなおかつ、私どもと違う見解をお出しになっておられる方々もたくさんいらっしゃいます。そういった方々を含めまして、この際、猿投窯で生産されましたやきもの一窯跡から出土しましたもの、全国各地の消費地から出土しましたもの—そういったものを一堂に集めまして、その全貌を十分に検討していただき、その上で、あらためて猿投窯というものを、奈良・平安時代におけるやきものの中に正しく位置づけていく、このことが私どもあるいは当館学芸員の主要な任務であると考え、今回の猿投窯展およびシンポジウムを開催することとしたわけであります。

猿投窯の問題をめぐりまして、先程申し上げましたような、いろいろな説が出ておりますが端的に申し上げますと、私どもが従来、発掘の成果に基づきまして発表してまいりました編年観でありますとか、あるいは年代観、そういったものに対して賛同し、それに依拠して各地域の伴出土器の研究をされている方と、今一つは、違った年代観で猿投窯を別の見方でみようというように考えておられる方々、そういった、大きくわけまして2つの流れで猿投窯というものが、今日の学会において認識されているように考えております。それは、主として年代に関する問題が重点となりますけれども、今回はそういった問題も、シンポジウムの過程におきまして、あるいは課題の1つになろうかとおもいます。けれども、古墳時代におきましては陶器窯が全国の基準資料として使われておりますのと相対しまして、奈良・平安時代におきましては、猿投窯というものが、一つの大きな基準として使用されている、あるいは使用されなければならないやきものであろうかというように考えますので、2つの説のいずれかに賛同するにしろ、拒否するにしろ、各地のそれぞれの歴史にかかわる問題として、まず各地の土器・陶器の変遷を正しく把握することが必要だと思います。私どもシンポジウムを企画しましたメンバーと致しましては、まず、そういう依拠すべきものを離れましてそれぞれ、東北から九州まで、各地におきまして、土師器でありますとか、あるいは須恵器、あるいはその他のやきもの、そういうものを独自の地域に基づいた編年観をお樹てになつておられる、各地域の研究者の代表的な方々をお願いしまして、独自の編年体系と申しますか、そういったものをそれぞれ御発表いただいて、各地域でどのくらい考え方の上であるいは編年観の上で、あるいは又年代観の上で差異があるのか、そういう実態をまず、私どもも含めまして、皆さん方で共通認識としてもつことが必要なのではないかということが、今回のシンポジウムを開きました最大の課題でございます。

問題点は、非常にたくさんございます。

まず、大きな問題の一つは、奈良・平安時代に焼かれました、やきものの名称の問題でございます。古墳時代から奈良・平安時代あるいは鎌倉・室町時代の古代・中世を通じまして、従来私がいちいちいろいろな形で発表してまいりました、やきものの範疇と致しまして、大きく土師器系、須恵器系そして甍器系と、三つの範疇に分けてやきものの分類をしてみたいわけですが。古墳時代から奈良・平安時代にかけて、当時の最も基本的なやきものでありますのは、申すまでもなく土師器と須恵器であります。7世紀後半代に入りますと緑釉陶器が焼かれるようになりますし、8世紀代になりますと、唐三彩を真似ました三彩がでてまいります。それと相前後致しまして、この猿投窯において、灰釉をかけました高火度焼成の、従来、灰釉陶器というように呼んでまいりましたやきものがでてまいります。この、三彩・緑釉などの鉛釉を基礎釉と致しました低火度焼成の施釉陶器と、灰釉を基調と致します高火度焼成の施釉陶器は、平安時代におきましては、共に『シノウツワモノ』という形で呼ばれております。これは、私どもがそういう解釈をしてみたいわけでありまして、全面的にそれが正しいかどうか、あるいはまた、全国のみなさん方に受け入れられているのかどうかということも、一つの問題ではございますけれども、一応、土師器・須恵器を基調と致しました日常容器の上に、施釉陶器として低火度焼成の彩釉陶器と高火度焼成の灰釉陶器が高級陶器として、当時使われていたというのが、奈良・平安時代におけるやきものの最も基本的な姿をなすものであります。しかし、灰釉陶器という名称につきましては、灰釉をかけるというような技法は奈良時代に始まりますが、その後今日まで、やきものの中ではずっと続いているわけでありまして、今日においても灰釉陶器と称すべきものは、日常の一般容器

の中で多数みられるわけであります。そういう点で灰釉陶器という名称は、学問的にある時代限定をするという点ではやや不適当な言葉であります。と申しまして、それを直ちに『シノウツワモノ』という形で置き替え得るかどうかという点で、やはり一つの問題点になろうかと思えます。それは後程、猿投窯の全体概況につきまして、当館の主任学芸員であります柴垣氏の方からお話があるかとおもいますので、私は詳しくはふれませんが、そういう灰釉陶器の名称の問題、これが一つの問題点であろうかと思えます。

それから土師器につきましても、これは土師器そのものとそれから土師器系と称しております中の黒色土器あるいはその系譜をひきますところの瓦器、この瓦器につきましても、黒色土器から中世初期に瓦器に転ずるといふ瓦器としての捉え方と、もう一つは早く古墳末期ぐらいから軟質の、従来瓦器と呼ばれておりました瓦質のやきもの、須恵器とは若干違うそういった性質のものを、同じ流れの中で捉え得るかという問題も、やはり今回の課題の一つであろうかというようにおもいます。

次に、須恵器につきましても、それはいうまでもなく5世紀から10世紀あるいは11世紀まで使われました土師器と並んで最も主要な日常の基本容器の一つでありますけれども、従来、この須恵器の研究、これは陶邑を中心としまして全国的に陶邑を基準とした編年観あるいは研究が行われておりますが、陶邑におきましては後程、また中村さんの方から詳しく御報告があるかと思えますけれども、ほぼ10世紀ぐらいまでしかたどり得ないという問題があります。ところが、それ以外の東日本の地域におきましては、11世紀段階におきましても、なおかつ須恵器が焼かれておりますし、あるいは須恵器がやや軟質化した須恵系土器というように今日一般に呼ばれておりますやきものがありまして、それが中世陶器へそのままの形で存続していくわけです。我々の祖先が間断なく、絶えずやきものを使いながら生活を営み、今日の歴史を築いてきたというような観点にたちますならば、やきものにおいても断絶ということは考えられないのでありますから、なんらかの意味における連続性というような問題が大きな課題になるかとおもいます。ところが最近におきましては、特にこの昭和30年代の終りから40年代・50年代に入りまして、まだ高度成長の開発期の余波が残っておりますため、全国各地において歴大な遺跡の発掘が行われておりました、それに従事しておられる行政担当者の方々のご苦勞は大変なものです、そういうさし迫った行政発掘に取り組んでおられる皆さん方にとりまして、横の関連を考えるよりも先に、まず当面するところの在地の問題に非常に大きなウエイトを置いて研究を進めてこられたわけであります。そういう点におきまして、現在では地域・地域で相当大きな考え方のズレが見受けられるわけでありまして、それをつなぎとめる一つの接着剤と申しますか、そういった意味あいにおきまして猿投窯の施釉陶器というものが、昭和40年代以降かなり大きな役割を果たしてきたのではないかと考えております。ところが、その猿投窯の年代観をめぐりまして、大きなズレが生じておりました、そのことが地域の編年観あるいは年代観といったものを打ち壊していく場合に、逆に障害すら起しかねないという問題が、率直に申しまして、出てきているのが現状であります。そうした問題が、わずか1日半のシンポジウムにおきまして解決されるとは当初から考えてはおりません。むしろ、各地域・地域の実体に即した現状をご報告いただいて、それぞれどの程度、地域・地域で考え方の上に違いがあるのかという研究の実態を皆さん方の前で、お互いに共通認識としてもつことから出発したいと考えるわけでございます。先ほど問題として出しました中世の須恵器—今日は平安時代が主体ですが、やはり中世への連繫の問題もこのシン

ポジウムの一つの課題として予定しております一で注目されますのが、昭和36年以来研究されております、能登半島の珠洲焼であります。この珠洲焼につきましても、後程また吉岡さんの方からお触れになると思いますが、これは随分長い間、後進地域における須恵器の残存形態というような形で取り扱われてきたものであります。昭和40年代の終りから今日にかけての数年間、西日本各地におきまして、兵庫県の魚住窯を中心と致します中世の須恵器、あるいは須恵系の土器と申しますか、そういった新しい発見が相次いで出てまいりました。この須恵器が平安時代の須恵器とつながるものか、あるいは断絶するものか、あるいはそれぞれの中心の移動によって連繫されて行くべきものか、そういう今後さらに調査研究すべき大きな課題をもってあります。中世の各集落遺跡から出てまいりますやきものをみますと、土師器・須恵器が圧倒的多数を占めておりまして、いわゆる六古窯と申しております、瀬戸であるとか常滑であるとか、そういう目立ったやきもの類はわずかしか含まれていないというのが集落から出てまいります実態であります。それに加えまして、地域によりまして、多い少ないはありますけれども中国陶磁が何らかの形で生活用器としても使われ、またそれが、それぞれの地域のやきもの生産の上に大きな影響を与えているという事実も次第に明らかになってきており、関連の課題ともなっております。(これら中国陶磁の伝統を最も早く継承し、それを正しく中世の瀬戸へ繋ぎとめ、今日のこの窯業中心地域をつくりましたのが猿投窯であります……。) そういう須恵器の問題—古代・中世を通して、これを須恵器として捉えるか、あるいは中世の須恵系のやきものを、どういう名称で取り上げていくべきかということも、名称の問題として一つの課題になろうかとおもいます。

土師器の問題におきましても、須恵器との関連におきまして、10世紀以降になりますと、土師器と須恵器の相互連関という問題が出てまいりますし、陶邑窯を中心と致しまして、全国各地の須恵器窯が10世紀以降稀薄になってくるという問題、それから違ったやや軟質のやきものに転化していくというような問題、あるいはそれを転機と致します壺・甕と碗・皿との分業の問題、そういう問題も須恵器の画期を示す一つの問題点として、やはり全国的な問題であろうかと思えます。この点は、須恵器と呼ばれているやきもの本質を、地域においてどのように捉えるかということにつながる大きな問題であります。私は、あえて自分の所見を述べさせていただきますならば、土師器・須恵器ともに、古墳時代から室町時代まで一貫して日常の生活用器として用いられてきた、最も主要な窯業形態であるという認識にたっております。従いまして、古墳時代を前期、奈良・平安時代を中期、平安末から鎌倉・室町時代の須恵器を後期の須恵器と、大きくそういう3段階に捉えようというのが私の立場でございます。ただし、これはあくまで貯蔵形態であります、中世の六古窯などに多量にみられます壺・甕・播鉢、またそれに類似する貯蔵形態あるいは調理具など、一部の器種に限られておりまして、日常の食器でありますところの碗・皿類は10世紀以降、地域によって随分大きな変質過程をたどっております。そこで、土師器とまぎらわしいものが出てまいりますし、あるいはやや軟質化した須恵器風のものもあれば、この地域のように釉はなくなっても、なおかつ非常に硬質のやきものとして存続するもの、あるいは釉をかけたもの、そういうさまざまなやきものがありますし、土師系の問題におきましても、最初に申しました黒色土器から瓦器への問題、そういう重要な問題が、古代末期・中世初頭にかけての大きな窯業の変化として問題になってくるわけであります。

今回のシンポジウムの最大の関心事は、やはり猿投窯におきます編年観であり年代観であろうかと思えます。この点につきましては、まだ私どもと致しましても、たえず発掘調査するたびに

年代が揺れ動く、あるいは編年観も揺れ動いていくというのが現状でございまして、まだ確固たる編年観あるいは年代観というものは確立しておりません。そういった点で、猿投窯の年代観あるいは編年観を論じられる方々には、いろいろなご迷惑なり、不安感なり、またさまざまな余波を投げかけているという点は、私ども重々自覚しておるつもりでございまして。そういう年代観につきましても、今回のこのシンポジウムにおきます当館側とそれから私ども名古屋大学の側から発表致します新しい編年観の相互検討の問題、そういったことを通じまして、今までの、長年使ってまいりました私どもの編年観に対しまして、若干の修正案を提案したいとも思っております。そういういろいろな問題がわずか1日半の中でとても消化されるとは思いませんけれども、それぞれの地域におきます研究の中心的な役割を果しておられる先生方に、それぞれ御発表いただきまして、各地域におきます実体を明らかにしていただくということが、今回のこのシンポジウムの第一義的な目的であるというように考えているわけでありまして、その問題を経たのちに、初めて年代観があらためて問題になるかというように存じております。そういう点で、年代観に対して何らかの答えが今回出されるのではないかというような、ひそかな期待も、あるいは皆さん方の中でお持ちかとは思いますが、今回、果してそこまでの検討ができるかどうかという点に対しまして、司会者側と致しましても自信はございませんし、またあせってそういった問題に早急な結論を出そうというような目的を持っておりません。あくまで地域の実体について、相互認識を深めあう場として、このシンポジウムを進行させたいというように考えておるわけでございます。

時間がございますので、いろいろ申し上げたい点もございまして、それはお互いの発表のあと、総括討論の中で、また問題点としてお出しただいて、いろいろそういう問題についても深めあって行きたいというように考えております。お手元にお配りしてございます資料の中で—これは当館側で御発表いただくのが至当かと考えますが、一応部外者ではありますが企画に参画致しました私から若干申し述べさせて頂きたいと存じます。当館側にはお許し頂きたいと存じます。—この猿投窯の図録でございまして。これに発表しております猿投窯に関する編年体系、これは従来私が各所で発表してまいりました。そういう編年観を、変更なしにそのまま踏襲して再録してございまして。その点で今回発表致します、再検討修正案というようなものとの間にくい違いがございまして。従ってこのプリントの付図(本書P56~63)につけました、編年観との間にくい違いがあります。その点は私ども研究室の斉藤君の方から詳しい発表をする予定でおります。それから、この印刷致しましたレジュメと付図、この他に中村さん、吉岡さんから別を持ってきて頂きました付図がお手元に届いているかとおもいます(本書各発表者の項に集録)。そういういくつかの資料を通しまして、それぞれのブロック別に、東北から始めまして九州まで各地域の奈良・平安時代、特に平安時代を中心と致しましてその前後を含む、かなり幅の広い、500年近い年代の間の問題、そういったものについてこれから御発表いただきたいと思う次第でございまして。

もう発表の時間がまいっておりますので、私のシンポジウム開催の趣旨説明はこれくらいにさせていただきます、本題に入っていきたいと存じます。どうか、皆さん方も、よろしくご協力

